

## 『無門関』

岩波文庫刊  
訳注：西村 恵信

無門関は、そんなわれわれに生きていくということの本当の意味を教えてください、人生の必読書といえる。私は本書を読んでいると、次の聖書の一節が、なぜかいつも浮かんでくる。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかして帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(旧約聖書『ヨブ記』1章20節)。

つまり、何も悩むものはないのである。

問題である。無門関には48の公案が掲載されている。前述の公案を直訳すると、「趙州和尚の話であるが、ある時、ある修行僧が『犬にも仏性があるのでしょうか』と質問したところ趙州和尚は『無』と答えた」となるが、この「無」の意味を考えなさいということである。この無は、有る無しは無ではない。

この答えは、公案の模範解答集である現代相似禅評論によると、「師家(師匠)の前に端座し力を極めて『む』と絶叫する」とある。僧堂に行くと「む」と絶叫する声がかえることがあるが、実にこれである。禅僧は、ここで「無」の一字になりきることを師匠から求められるのだが、私は禅僧ではないので私流の解釈をここに示そう。「お前はアホか! そんな観念的なことを考える暇があったら、今ここにいるお前自身がやるべきことだけをただひたすら無心にせよ」だ。今ここに存在しているこの自分になりきれ、ということなのだ。学問をするときには唯ひたすら学問になりきれということだ。試験を受けるときは試験になりきるのだ。勉強をするときは勉強になりきる。

現代人の多くは観念の世界に生きており、概念や思考に感じがらめからめとられている。心と体が引き裂かれている。無門関は、そんなわれわれに生きていくということの本当の意味を教えてください、人生の必読書といえる。

私は本書を読んでいると、次の聖書の一節が、なぜかいつも浮かんでくる。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかして帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(旧約聖書『ヨブ記』1章20節)。

つまり、何も悩むものはないのである。



「趙州和尚、因みに僧問う、『狗子に選つて仏性有りやもた無しや』。州云く、『無』(趙州狗子)という公案で有名な無門関は、中国は宋時代の禅僧無門慧開によって編纂された、禅宗の僧堂で修行する雲水のための公案集(問題集)である。

公案とは、修行中の禅僧が師匠から出される

## 学生スタッフ コラム 8



大学前のいちよう並木が色づく季節となった。秋である。秋と言えば、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。スポーツの秋、食欲の秋、芸術の秋……など、多く挙がると思うが「読書の秋」に注目してみたい。

読書に対し、皆さんはどんなイメージを抱かれているのだろうか。人によってさまざまかとは思いますが、私は近年、若者の本離れが進んでいるように感じる。代わりに、携帯だけで手軽に読める、携帯小説がかなりの勢いで普及してきている。加えて、人気のある携帯小説は書籍化や映画化もされており、その勢いは絶大なものだ。

しかし、携帯小説では補えないものがあるように思う。語彙力だ。そもそも携帯小説は、プロの作家が書いているわけではなく、ほとんどを若い女性が書いているので、必然的に私たちがとって身近な文章になる。それも若者に支持されている理由の一つと考えられるが、子どもの頃に小説を読むことで語彙力を培ってきた私には、あまりいいものに思えない。普通の小説なら、途中で知らない言葉が出てくることはよくある。例えば、「逡巡」や、「快哉」などの言葉である。これらは普段使われるような言葉ではないだろう。しかし、携帯小説で、このような意味がわかりにくい言葉が使われることはほとんどない。

私は小さい頃から、本を読むのが好きだった。図書室が大好きで、長期休暇のときには貸出上限まで本を借りていた。

そして、読んでいる本の中に知らない単語が出てきたときには、すぐに意味を調べるようにしていた。そのおかげだろうか、作文は苦手ではなかったし、気付いたら文章を書くことが好きになっていった。

小説は、語彙力だけでなく、想像力も豊かにしてくれる。文章だけからその場面を思い浮かべるだけでも、臨場感が出てくる。文章にはされていない場面を深読みして、自分だけの解釈をすることもできる。私はそのようにして小説を読むのがとても好きだ。自分だけの世界に浸っているような感覚が、とても好きだ。この点でも、恋愛の話ばかりの携帯小説ではなく、作家が書いた小説をお薦めしたい。

さて、秋である。今年の秋は読書の秋にして、いつもは読まないようなジャンルの小説なり、有名な作品なり、好きな作家の小説なり、とにかく本を読んでみよう。いつもは携帯小説しか読まない人も、たまには小説を読んでみよう。もしかすると、今まで気付かなかった読書の良さに、気付けるかもしれない。

(学生広報スタッフ 三吉 佑佳)